

日本組織培養学会

昭和49年12月30日発行

会員通信

第24号

発行責任者

※ 佐藤温重・※ 梅田誠

※※ 加納永一

※ 横浜市南区浦舟町 横浜市大・医学部

※※ 京都市東山区山科御陵 京都薬大

§ 1975年～1976年度幹事選挙について

幹事選挙が別項(色頁)の要領で行われる。例年投票率が極めて低いが、学会の最高審議機関である幹事会の重要性を考え、多数投票されるように。

§ 第39回研究会開催について

次回研究会の世話人である堀川正克氏から下記のような予定で行うとの連絡があった。

日本組織培養学会第39回研究会を下記の要領で開催致しますので御準備下さい。

日 時：昭和50年6月20日(金)、21日(土)

会 場：金沢大学医学部 十全(じゅうぜん)講堂

シンポジウム：哺乳類細胞における突然変異の機構解析

司会者(未定)

世 話 人：堀 川 正 克

〒920 金沢市宝町13番1号

金沢大学薬学部放射薬品化学教室

電(金沢)62-8151(内線441)

細胞の癌化機構の解析と関連して最近特に問題になっている哺乳類細胞における突然変異の問題を今回のシンポジウムにとり上げました。あらゆる角度から掘り下げて検討してみたいと思います。くわえて初夏の北陸路は勉強にリクリエーションに最高の季節かと思ひます。研究会は金曜日、土曜日ととって日曜日をあけましたので皆さんふるって御参加下さい。

(堀川正克)

§ 幹事会及び総会議事録

11月28日 東大医科研において幹事会が開かれ、下記の案件について討論が行われた。各案件は、29日に行われた総会においていずれも可決承認された。

なお、幹事会出席者は、堀川、佐藤、久米川、三宅、吉田、野瀬の各幹事、山田会計担当、黒木、乾前幹事、梅田会員通信担当、オブザーバーとして永田前世話人であった。

(1) 会計報告。新会計年度は来年1月からスタートする。会費は年1000円すえおきで当面は健全財政を維持できる。

会費は直接山田幹事に送らず、学会事務センターに納入すること。

(2) ビブリオグラフィーの現状と今後、必要性について議論され、利用価値を疑問とする意見と、学会の活動として唯一のものであり充実させて存続するという意見などが出された。来年

は発行するが、その後どうするか会員の意見をよく聞いて決定することになった。

今年度は原稿が61部しか集まらず、締切りを12月15日までのばすので会員の協力を御願いたい(乾担当幹事)。

(3) 次回研究会は下記の要領によって開催する。

世 話 人：金沢大学 堀 川 正 克

会 期：昭和50年6月20日、21日

場 所：金沢大医学部講堂

シンポジウムのテーマ：

「組織培養による哺乳類細胞の突然変異の機構解析」

(4) 次々回研究会は下記のごとく開催する。

世 話 人：独協大学医学部 山 田 喬

(5) 会員通信には、会員の情報交換のため記事原稿を積極的にお願いしたい。また住所変更もお知らせ願いたい。(梅田担当幹事まで)

(6) 会員名簿は、従来東地区で作製してきたが、49年度は、堀川、佐藤幹事が行う。

(7) 昭和50、51年度幹事の選挙は、在東京の幹事(三宅、野瀬)が行なう。投票用紙を会員通信に同封するので御協力をお願いしたい(別項)。

(8) 新入会員の承認および紹介(別項)。

(9) 名誉会員の制度を作る。資格は、現役を引退した人で、組織培養学会に貢献した人を、その時の幹事会が選出する。

(10) 幹事会で、ニューサイエンス社発行予定の組織培養関係の雑誌に対する学会の協力について議論された。商業誌なので学会として公式には関与せず、個人的協力にとどめることとした。なお、研究会の案内などに利用させて頂くことはありうる。(文貴 野 瀬)

§ 会 計 か ら

春の総会で決定したように、昭和50年度から会計年度は1月1日～12月31日となります。したがって次号の会員通信に49年度の会計報告をのせ、50年春の総会で承認を受けることとなります。

近々学会事務センターから50年度会費の請求書が会員各位へ送付されます。学会の事業は会費によってまかなわれることを御理解いたしまして、できるだけ早く会費を納入するようお願い致します。

会計幹事は会費を取扱いません。すべて学会事務センターへ納入して下さい。新入会員の方で入会の手続と一緒に会計幹事へ送金される方があります。入会は春、秋の研究会での総会で承認され、その後学会事務センターから請求書がまいります。この点を推薦者は入会を希望される方へよく御連絡下さい。

(会計幹事 山 田 正 篤)

§ 第38回研究会を終つて

久米川 正 好 (城歯大・口解第一)

第38回研究会は11月29日～30日の両日、東京大学医科研究所一階講堂において開催された。国際癌学会等を考慮し例年より研究会の開催が1ヶ月遅く必配していたが、お蔭で天候にも恵まれ、また国労、勤労のストも27日夜解決し、早朝から多数の参加者があり、世話人として大変嬉しく思った。登録者は非会員が138名で会員(79名)を大きく上まわり250名を越える実参加者があったようである。東京では異例の懇親会を企画してみたが、約60名の参加者があり、一応の目的は達せられたと思う。

3～4題の一般演題の申し込みをおことわりしたにもかかわらず、19題の一般演題があり、1日半に納めるのに大変苦心した。1題の持時間は30分となり、できるだけ多くの時間をとり、充分な討論をとるという本研究会の主旨とは反するプログラムとなった。1日目は9:15～5:45という強行スケジュールで、演者および参加者に大変御迷惑をかけたと思う。しかし、参加者、演題数が多くなったことは組織培養人口の増加を物語っており、これからの組織培養学会の在り方、使命も当然変わるのかもしれない。

今回のシンポジウムはできれば1つのStoryを書いてみたい、また全体を通して聞いていただきたいということから時間を短かく半日とした。しかも演者もStoryに合った内容をいうことから企画者が演者を選び、内容に関しては無理なお願いをした。といったことから、一般演題の中にもシンポジウムにふさわしい内容のものもあったが、割愛させてもらった。抄録でお知らせしたように各演者の大変興味ある題材の提供と、速藤先生の名司会で最後まで席を立った人も少なかったことから所期の目的を達したものと自画自讃しています。

この続編をいつか企画していただければと願う次第です。

末筆ながら、医科研の勝田先生を始め癌細胞の諸先生に大変お世話になりました。厚く御礼申し上げ、また諸先生の今後の御健斗をお祈りし筆をおきます。

§ 米国組織培養学会—近況と活動— その2

沖 垣 達

(Pasadena Foundation for Medical Research)

そ の 活 動

附属研究所と培養技術研究会

すでに述べたように、TCAは発足当初から後進の指導に力を入れ、将来は学会附属の研究所を持つとする希望が常に潜在していたように見える。とくに20年に近く続いた学会主催講習会が1964年にいくつかの事情で中断されて以来、常設研究設備を必要とする声は具体化し、その可能性は注意深く調査され続けていた。

この結果、故W. Alton Jones氏の遺産を基盤にして、彼の名を冠した組織培養専門の研究教育機関が学会の希望でうまれることになった。ただし財政上は独立していて、TCAの管理下とは云えないが、事業上はTCAの一部として考えられる研究所である。

W. Alton Jones Cell Science Centerは、New York州の北端のPlacid湖畔の森林の中にある。この地は1932年の冬期オリンピック会場になった所で、風光明媚であるが、交通の便は決して良いとは云えない。車がなければ、一日一往復の小型機がかなり離れた隣村に降りるといった所である。しかし広い自然の中にある研究所の窓外に映えるものは樹林と高原と湖であって、まさに研究者の天国と云えよう。幸いにして私は、東北大山根嶺教授とともに、1971年6月の開所記念式に列席し、研究所の一切を見学する機会を得た。ここにそれを述べる時間はないが、故Gey博士の名を冠した図書室や、故Pomerat博士の名を取った顕微鏡映画実習室など、新しい設備が漸新なデザインのもとに設計された近代建築である。

現在このCell Centerには研究職の人々がいて各自の研究を進めているが、本来の目的の一つである技術指導講習会もすでに軌道に乗っている。すべての企画はTCAのEducation委員会によって作られ、講師および「学生」の人選も行われている。1973年度には10種目の講習会が開かれ、総計250人程の受講者が、100名以上の専門家の指導をうけている。1974年には実に48種目の講習会が開かれることになっている。実際の責任者はCell Center常任の親友M.E. Kaighn博士であるが、講師陣は全国から集められる。

今年のプログラムから主なものをみると、Principle courses (9コース)と呼ばれる中に、Cell hybridization, Cryobiology, Perfusion culture, Medical Virologyなどがある。Work shops (19コース)には、Interferon, Chromosome banding, Water standard and quality control, Mycoplasma and acholoplasma in biological and medical problemsなどがみられる。Techniques (18コース)では、Filtration, Organ culture, Clonal culture, Tissue typing, Analytical microscopy, Diploid cell cultureなどがある。いずれも一週間のコースであって、250~300ドルの会費を必要とする。ほかにLake Placidまでの旅費と、滞在費がいるから、かなりの出費を要する講習会である。しかし目下の所は、いずれのコースも盛会であるという。

TCA Film Library

組織培養の特長は生きた姿の細胞を用いることであり、従って研究結果を映画に記録するという特徴がある。TCAは早くからこの点に目をつけ、学会としてそれらの映画を集め、やがてFilm Libraryができあがった。とくに故Pomerat博士は特別の興味をもたれ、博士亡きあとも最近までLibraryは私共の研究所が責任をもっていた。ごく最近フィルムの保存はCell Centerが行うこととなったが、私共Film Library委員の顔ぶれは変らない。現在は50本の映画があり、TCA会員に限らず希望者には貸出す制度になっている。とくに医学部や生物科学の教室のある大学からの希望が多く、1973年にはのべ200本が貸出されている。費用は一週間6ドルとしてある。これらの映画の中には歴史的なものもあり、米国外で製作されたものも多い。日本からは、医科研勝田甫教授製作の「肝細胞と肝癌細胞の相関」と北海道大学牧野佐二郎教授(現名替教授)の「人類の染色体」が納められてある。いずれも英

語のナレーションがあるためにひんぱんに貸出されている。組織培養に関する映画をお作りの方は、動物、植物を問わず私宛に連絡されることを切に希望する。ただちに委員会にかけて、米国の研究者に紹介したいと思っている。

Cell Biology Program

最近 T C A は National Audiovisual Center, National Library of Medicine, Bureau of Health Manpower Education などの援助を得て、細胞生物学系コースの指導材料を研究発展するプロジェクトを新たに作った。細胞生物学は、生化学、生物物理学、病理学、免疫学、微生物学などと深く、しかも広く関連するために、要求は多く、しかし指導は困難になりつゝある。このプロジェクトは、政府が学会に資金援助を与えて新しい分野を開発整理しようとする試みである。T C A 会員を中心とするスタッフによって作り出される試案はいくつかの大学へ配られが教授陣、学生双方の評価をうけることになっている。考え方を変えれば、学会が資金を豊かにしようとする動きの一つにほかならない。

就職紹介

米国の学会をおとずれたことのある方は、そこに求人就職紹介の室があって、老若男女を問わず掲示板にいくついているのを見たことがあると思う。同じことは Nature や Science の各号の巻末をみても判る。私共は研究者を求めるとき、あるいは職を求めるとき、まず Nature と Science を調べ、同時に学会の Placement Service と呼ばれる委員会に連絡するのが常である。最もよい方法は、学会へ出席して、Placement Service で連絡をうけ、学会開催中に希望の人々と面接することである。

まず求人の場合を考える。米国の常として技術者の俸給は研究者の責任である。従って研究費を申請する場合に、それを計算に入れて予算を組まなくてははいけない。研究費が通ると仕事を初める前にまず人選をする。経験のある技術者を採用するには、若い研究者よりはるかに高給を払わなくてははいけないからこのへんの計画は綿密に立てなければはいけない。あるいは教室が新たに教授あるいは助教授を求めるときにもこうして学会を通じての紹介が多い。次に就職を考えよう。主として仕事を求めているのは、Post doctoral の学生と高給を求めると技術者である。最近のように研究費助成がきびしくなると、それに応じて研究職そのものが不安定なものとなる。従って、博士号を得ても、引続いてその大学に就職できることは少なく、あるいは新しいトレーニングを求めてほかの地へ移る人が多い。これらの人々は学会に出席し、個人的あるいは、Placement Service を通じて少しでもよい口をみつけようとする。T C A においても、例年求人と就職の掲示板に人々がむらがり、委員の世話で、用意された個室で面接が行われる。私は常々、米国の研究者は本質的に中小企業と変わらないという考えをもっているが、とくに人を求めるために個室の小さなテーブルで誰かと応待するとき、それを強く思うのである。T C A では、実際の面接のほか定期的に印刷物を配布して職業あっせんを行っている。私はこれを日本からの留学希望者が利用することをすすめたい。日本の場合、留学希望者の処理は指導教授の仕事である。教授が個人的な道を通じて、あるいはもう少し巾を広げて

弟子の留学先を見つけるというのがごく当然なことであろう。しかし前にも書いたように、研究費獲得競争ははげしいと、今までのビッグネームが「事業」を縮小することはざらにある。一方20代や30代の若い研究者が大きな研究費を得て、相棒を求めていることだって決して少なくない。米国の学会はこういうことにも利用されている団体であるといってもよいだろう。

以上、わずかの時間にいくつかの問題を取上げてみた。内容に違いがそれば、それは一切筆者の責任である。研究者の集団である「学会」という団体が将来においていかなる型態をとり、いかなる活動を続けるかということはいずれにおいても問題である。この点において米国組織培養学会の事業活動の報告が学会のあり方の一つの形態として参考にするとすれば、それは筆者の望外のよろこびである。

拙稿を脱するに当って、何度か連絡を下さり、紹介の労をとられた親友乾直道幹事に心から感謝の意を表したい。

参 考 文 献

1. 沖垣 達：アメリカ組織培養学会と、The W. Alton Jones Cell Science Center. 採集と飼育, 34:14-18, 1972.
2. 沖垣 達：米国細胞生物学会ならびに国際細胞生物学会連合設立委員会に出席して。細胞生物学シンポジウム 24:239-242 1973.
3. 沖垣 達：米国 NIHにおける組織培養シンポジウムに参加して。メディア・サークル, 19:69-76 1974.

§ 翼よ、あれが組織培養だ

先月リンドバークが歿くなった。パーカーの教科書にリンドバークという人の考案による環流培養装置や血清分離用の遠沈槽の写真や図がのっているが、先日米日したDr. Hayflickにきいたところ、これはまさしく大西洋をとんだリンドバークその人である由。カレルは仲々の政治家だったので、もともと技術屋であったリンドバークの大西洋横断の名声を利用し、培養用の色々な器具を考案させ、研究費集めに使ったらしい。ベセスダのNIHの前の研究所に数年間勤めていたそうである。御存知ない方が多いと思うので御一報まで。 (H. K.)

§ 雑誌「組織培養」(仮称)の創刊について

永 田 哲 士 (信州大・医・解剖)

本年春の研究会を信州大学において私がお世話させていただきました際、組織培養におけるラジオオートグラフィーの応用というテーマでシンポジウムを企画いたしました。その記録を印刷して残したいと考え、本年初め、東京のニューサイエンス社発行の月刊雑誌「細胞」にその原稿の掲載を依頼して引き受けて頂き、2回に分けて第1回がこのほど同誌本年11月発行の第6巻第11号p344-350に印刷になりました。その間同社の福田社長と佐久間編集長にお目にかかりました際、わが国には組織培養に関する専門誌がないので、このような記録の印刷には不便であることを私がお話しいたしましたところ、同社として、電顕形態学の専門誌「細胞」以外にも、組織培養に関する専門誌を発行することを考慮してもよいとの意志表示があり、

本年春以来その創刊の可能性を検討されておりましたが、今秋になりようやく採算のとれる見込みがたち、同社として創刊の決意をされ、私に編集、寄稿等についての協力を求められました。また学会からのバックアップも求められましたので、私から堀川幹事長に御連絡し、前回11月28日東大医科研で開かれました幹事会にはかかっていただきました。その結果、本学会としては正式にはニューサイエンス社の事業には直接関係しないが、本学会員が個人的に編集委員を引き受けたり、原稿の執筆で協力することにより、この雑誌を支援して行くことを了承することとなりました。また同社と本学会会員との間の橋渡しを私が個人的にすることを承認されましたので、その後、同社の佐久間編集長と御相談いたしまして、編集委員としては本学会員の中から各専門分野別に、山田正篤（東京大・薬・生理化学）、林俊郎（東京大・教養・植物学）、黒田行昭（国立遺伝研・発生遺伝学）、堀川正克（金沢大・薬・放射線生物学）、永田哲士（信州大・医・解剖学）の5名で個人的にお引き受けいたし、同社の編集の相談に乗ることになりました。ここに簡単にその経過を御報告し、会員各位の御協力をお願いいたします。

なお、同誌の発刊の時期は明年3月頃、体裁はB5版、横組み、口絵2～4ページ、本文48ページ、内容は技術講座、総説、原著論文、文献抄録、特集記事等から成る予定です。

§ 昭和49年度（11月）新入会員

研究機関	同住所・電話	氏名	専門分野
東北大学医学部 細菌学教室	980:仙台市星陵町 2-1 0222-34-1111	海老名 卓三郎	ウイルス学
東北大学医学部 第2外科	980:仙台市星陵町 1丁目 0222-74-1111	西平 哲郎	外科学 移植、癌免疫学
独協医科大学医学部 第1病理学教室	321-02:栃木県 下都賀郡壬生町 (北卜林888) 02828-6-1111 ext. 2178	山田 喬	病理学
慶応義塾大学医学部 微生物学教室	160:東京都新宿区 信濃町35 03-353-1211 ext. 2693	高野 利也	ウイルス学 微生物遺伝学
東京大学理学部 動物学教室	113:東京都文京区 本郷7-3-1 03-812-2111 ext. 2862	水野 丈男	実験発生学
東京大学医科学研究所 癌病態研究部	108:東京都港区白 金台4-6-1 03-443-8111	関口 守正	外科学

研究機関	同住所・電話	氏名	専門分野
東京大学医学研究所 ウイルス部	108:東京都港区白 金台4-6-1 03-443-8111	安藤俊夫	生化学
東京大学医学研究所 附属病院, 内科	108:東京都港区白 金台4-6-1 03-443-8111 ext. 351	谷 莊 吉	内科学(腎臓病)
農林省家畜衛生試験場 研究第2部, ウイル ス第1研究室	187:東京都小平市 上水本町1500 0423-21-1441 ext. 262, 265	田中 義 夫	獣医学 ウイルス学
三菱化成生命科学研究所 発生生物研究室	194:東京都町田市 南大谷11号 0427-26-1211	丸野内 稜	生物学
金沢大学薬学部 放射薬品化学	920:金沢市宝町 13-1 0762-62-8151 ext. 442	渡辺正巳	放射線細胞生物 学
参天製薬株式会社 研 究 部	533:大阪市東淀川 区下新庄町2-163 06-328-2666	疋田光史	放射線細胞生物 学
兵庫県衛生研究所 毒性試験部	652:神戸市兵庫区 荒田町2-1 078-511-6581	磯村公郎	放射線生物学
徳島大学教育学部 特 殊 教 育	770:徳島市南常三 島町1-1 0886-23-2311	佐久間モト	児童精神医学 (異常児の病理)

§ 昭和49年度新入賛助会員

研究機関	同住所・電話	氏名	専門分野
英国ステリリン社 日本総代理店 笛吹直宏事務所	650-91:神戸市生 田区西町35 三井ビル5階 078-331-5460	笛吹直宏	組織培養プラスチック シャーレ, 大量 細胞培養器の輸 入, 販売
株式会社東京エム・ア イ商会	103:東京都中央区 新川2-7-1 03-551-7873	氷見 静 寛	
株式会社シュミット	101:東京都千代田 区内神田1-2-8 03-293-6661	岡田 篤	
株式会社北医研	101:東京都千代田 区鍛冶町1-6-15 共同ビル, 日本ケ ミカルサプライ株 式会社(東京連絡 所) 03-256-7480	夏目卓幸	

§ 会員海外出張

石本秋稔 (愛知県がんセンター研究所・ウイルス部)

留学先: Laboratory of Viral Disease

Bldg. 7, Rm. 336.

National Institute of Allergy and Infectious

Disease National Institute of Health,

Bethesda, Maryland 20014, U.S.A.

出張期間: 昭和49年9月より2年間の予定

§ Bibliography 存続・廃止に関するアンケート

日本組織培養学会第38回研究会総会において報告しましたように1974年度刊行のBibliography用の原稿は11月20日現在(9月10日の第1回締切日を延期した)でさえ61通しか集まらない状況で、今後の存続の必要性が問われる事態にあります。1975年度のBibliography刊行補助金の申請書はすでに文部省に提出しましたので、1975年度刊行のBibliographyは従来通り刊行するとしても1976年度以降のものを廃止するか存続させるかについて各員各位の忌憚のない御意見をおきかせ下さい。

御参考までこれまでBibliographyの刊行に御尽力いただいた諸先生方の御意見を以下に掲載いたしましたので、それらを参考のうえ別紙のアンケート用紙に御解答下さい。なお、Bibliography刊行には本学会運営費の大半をつぎこんでいる現状、および刊行にあまっている世話人の労力等も加味した上で幹事選挙投票用紙に記入してあるアンケートにお答え下さい。

日本組織培養学会 幹事会

§ Annual Bibliographyの発行について

日本組織培養学会は昭和31年(1956)に創立され、会員は95人であった。その年の9月に東大医科研(当時は伝研)において第1回の研究会が開催され、50余人が参加した。そして次の年にはもう第1巻のBibliographyが山田正篤君の編集で発行され、1956年における日本国内での組織培養による研究の業績を全世界に紹介した。以後、遠藤浩良、高野宏一、山田正篤、黒田行昭、奥村秀夫、黒木登志夫、乾直道の諸君が編集し、計17巻が今日まで続いて毎年発行されてきた。黒田君にいたっては8年間も編集を引受けてくれた。並々ならぬ御努力である。

経済的にも労力の点からも、そんな無理をして何になるのかという疑問を持つ人があるかも知れない。しかし学会というものは、研究成果を発表して、お互に情報を交換し合うことだけが目的ではなく、研究業績を記録し、それを世界中に知らせると共に後世にも遺す義務がある。

かって欧州の培養学会が“我々は日本の培養学会の活発な活動を見習う”と云って、同じようにBibliographyを発行しはじめたのだが、息が切れたのであろうか、3年位でやめてしまった。現在1956年までさかのぼって文献を集め発行しようとする、極めて大変な仕事である。Dr. MurrayはBibliographyを出版して培養界に大きな貢献をしたが、それも中断されてしまった。まことに残念なことであるが、今となってはその後を埋めるのは不可能に近いのではあるまいか。

Bibliographyを発行するには、会員外の業績も広く網羅することが望ましい。“日本”の培養研究の紹介だからである。これは各学会別に担当者をきめて手分けしてしらべれば可能なことであり、数年前までは実行されていた。

Bibliographyを発行することは日本組織培養学会にとってはきわめて大切な使命の一つと信じている。

(東大医科研 勝田 甫)

§ 日本組織培養学会 1975 及び 1976 年度幹事選挙の御案内

次期幹事選挙を下記の要領で施行致します。

- (1) 被選挙人名簿兼投票用紙を、この会員通信に同封して発送します。
- (2) 東および西日本から各2名を選び、その姓名を○で囲んで下さい。
- (3) この名簿は姓名と所属のみ記してありますので、各被選挙人についての詳細を御調べになりたい向きは、73年度名簿および会員通信18~24号を御参照下さい。
- (4) 40才以上の会員、海外在住会員および今年度で退任する幹事（久米川、三宅、角永、堀川）の姓名は、被選挙人名簿から削除してあります。
- (5) 被選挙人名簿兼投票用紙に御記入の上、1975年2月15日までに下記へ御郵送下さい。

〒194 東京都町田市南大谷11

三菱化成生命科学研究所細胞生物学研究室 三宅 端 (消印有効)

- (6) 開票は、毎年関西在住の幹事で行なっておりますが、今回は例外的に東京在住の幹事がこれを行います。

以上、よろしく御協力お願い致します。

(三宅、野瀬)

§ 名簿作製についてのお願い

日本組織培養学会会員の新しい名簿を作る時期となりました。同封の葉書に、研究機関および所属部門、同住所（郵便番号もお忘れなく）および電話番号、氏名、生年月日、および専門分野を御記入になり、昭和50年2月15日までに到着するように御投函下さい。

会員の皆様の協力をお願いします。

名簿作製担当 佐藤弘毅 堀川正克

返送宛先：〒565 吹田市山田上

大阪大学微生物病研究所

佐藤弘毅

§ 編集後記

昭和49年度秋号をおとどけします。発行が予定より1ヶ月近く遅れ、会員の手元にとどけられるのは、年を越してからということになってしまったことを、お詫びいたします。

幹事会は、Bibliographyの存続・廃止について会員の意見を聞くため、アンケートによる調査を行うことにし、これに関連して刊行に御尽力いただいた会員の御意見を、本号に集録することになっていましたが、原稿締切り期日の関係で、勝田氏の御意見を掲載するにとどまってしまいました。

本年もともかく予定の3号を発行することができました。これは、御多忙の中にもかかわらずご執筆いただいた会員のおかげです。ここに深く感謝いたします。

昭和50年春号(25号)の原稿締切りは3月15日を予定しています。会員の皆様の投稿をお願いいたします。(S)